
けいおん ♪ ～奏でる物語～

桜 みずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん♪々奏でる物語

【Nコード】

N8756Y

【作者名】

桜 みずき

【あらすじ】

朱智^{あけち} 遼^{じょう}は自分の容姿にコンプレックスを持っている。尖端恐怖症で伸びっぱなしになながらも、しっかり手入れをしている長髪と持ち前の童顔ちびっ子で女の子と間違えられる事がある遼はある日、軽音部の部長に半ば強引に軽音部に入れられてしまう。そこで巻き起こる軽音楽の物語。気まぐれに突っ走ります！

プロローグ！（前書き）

始めましての方、始めまして！

お久しぶりの方、お久しぶりです！

さて、『けいおん』奏でる物語』が始まるよ〜♪

みんな一緒に「せえの！」でアレ言っよ！

せえの！！

『No Thank you!!』

ちよ！それEDでしょ！！

しかも、否定されたし！

ちなみに何て言えは良かったんだろw

では、本編をお楽しみ下さい！

ブローグ！

ピピピッ！…ピピピッ！…ピピピッ！…

自室に目覚まし時計のアラームが鳴り響く。

俺は重たい瞼を開けようと頑張りながら手探りでうるさい音を消そうと奮闘する。

「…あ…何処だっけ…？」

しかし、目覚まし時計にいつまで経っても触る事が出来ない。

いつもと同じ場所に置いているので、いつもと同じ場所に手を伸ばせばアラームを消せるのにもかかわらず、今日は目覚まし時計に触れる事ができなかった。

俺はこのままじゃうるさいので、しょうがなくベッドから顔を上げ、枕元を見る。

「あれ？」

やはり、枕元には目覚まし時計がなかった。ベッドの下を見てやると目覚まし時計が転がっていた。

俺はアラームを消すと、ベッドから降りて自室を出る。

リビングに向かうと朝ご飯がテーブルの上に並べられていて、キッチンではカチャカチャと音を立てながら皿洗いをしている同居人

がいた。

「おはよう、奈亮^{だいすけ}」

俺は同居人、水河^{みながわ} 奈亮に挨拶をした。

「お、起きた？ 遼^{りょう}もおはよう」

「うん。おはよう」

俺達は2LDKの『広い』に分類される家賃7万円のマンションに住んでいる。とは言ってもまだ一週間だけだけど…。本当は俺一人で住むことになっていたが、訳があつて奈亮と一緒に住むことになった。

まあ、自慢じゃないけど、俺の親は結構な金持ちだったりするので、毎月12万円の仕送りがある。家賃も奈亮と半分ずつ払っているので実質家賃3万5千という格安だ。

奈亮は皿洗いが終わったらしく手を拭いてリビングに顔を出す。

「いよいよ今日だな」

不意に奈亮が言った。

「今日から高校生かあ…」

だけど意味はわかった。今日は俺達が入る高校の入学式。

『私立桜ヶ丘高等学校』

それが俺達の入る高校の名前だ。去年までは『私立桜ヶ丘女子高等学校』だったが、今年度から共学に変わった。理由は良くは分からないが、巷では「少子化の問題ではないか」と言われている。

「男子何人いると思う？」

俺は奈亮に聞いてみた。

「さあ？わっかんね」

俺達は席に座り、朝食を取る事にした。

卵焼きに、塩鯖、そしてみそ汁に白いご飯……毎回思うけど、100点の朝食だ。奈亮の料理の腕は本当に凄い。夕食もかなり手間がかかっているのを作ってくれる。しかも、料理以外の家事も全般やっつけてくれるものだから、将来は良い主夫になりそうだ。

卵焼きを半分に割ってみる。中は程よく半熟、さらにはチーズも入っていた。

その卵焼きを口にいれる。卵焼きが口の中でとろけ、一瞬にして味が口いっぱい広がる。

「ああ……もう、成仏していい……」

「おいおい、大袈裟過ぎだ。それに、そこで使う表現として正しいのは、『昇華していい』だろ。成仏じゃもう死んでるぞ」

奈亮がツツコんでくれた。どうやらツツコミの腕も多少有るよう

だ。

そんなやり取りをしながら、20分弱奈良が作った朝食を堪能した。

・・・・・・・・・・

朝食を終え、自室に戻り桜高の制服を着た。深い紺色のブレザーに学年色の青のネクタイに紺色のズボン。それを身に纏った俺は姿見に映る自分をみた。

「……………似合わなっ！」

あまりの似合わなさについつい叫んでしまった。しかし、似合わない原因は自分の顔にある事は分かっているのではないことだ。髪を切る事を躊躇いながら3年間も伸ばし、腰辺りまで届くようなしつかり手入れのしてあるサラサラな髪。男とは思えない可愛らしい顔。男とは到底思えない線の細い体つきに小さい背。誰がどう見ても男装をしている女子だ。

「はぁ……………」

俺は溜息を吐きながらスクールバッグを持ち、自室から出た。

自室を出ると奈良が待っていた。

「遼も用意出来たか」

「……………」

「どうした？」

「いや、何でもない…」

奈亮は普通に桜高の制服を着こなしていた。元々背が高く、見た目も人目を引くほどのかつこよさがある。髪もワックスをかけているらしく、かなり決まっている。横を歩くのを躊躇したくなる程のイケメンになっていた。

「やっぱり奈亮ってかつこいいな」

俺は少し悪意を込めて言った。ただ単に奈亮がかつこよすぎるから嫉妬をしているだけだが…。

「そうか？おれは遼が女だったら良いな〜って思うこと結構あるぞ。可愛いし。私服姿なんてまんま女の子にしか見えないし」

「なっ…！！俺は男だ！可愛いとか言われても全然嬉しくねえよ／＼！」

「はっ！そんな顔赤くしちゃってさ、本当は嬉しいんじゃないの？」

「おうえ…BLとかやめろよ…。気持ち悪い」

「そうか？遼とだったら花があって良いと思うぞ？」

「奈亮…。それ本気で言ってるなら病院行ってこい」

「んじゃ学校行く前に病院行くか」

「マジで本気で言ってたの!？」

「あははは!嘘だよ嘘!ほら、時間無いから行くぞ」

「あ、うん」

俺達は新しい生活の第一歩を踏み出し……

「うお!」

奈良が何故か玄関で躓いた。

「空気を読んで欲しいね。まったく…!」

「何故俺はキレられた？」

「自分の胸に聞いてみる」

何はともあれ新しい生活の第一歩は踏み出せたから良しとしますか。奈良は異様に小さい一歩だったけど…。

プロローグ！（後書き）

次回から原作キャラが出ます！

楽しみにしていて下さい！

ちなみに1週間に1回のペースで更新していきたいと思えます！

第一話『入学!』（前書き）

二日連続の投稿!

ふう…期末テストが終わったから気楽にいけて良いですよ〜

………あゝ…センター試験だるい…

では、本編をお楽しみ下さい!

第一話『入学!』

「入試の時にも思ったけど、やっぱり桜高ってデカイな…」

まだ肌寒さを残す4月の上旬ちよい過ぎ。私立桜ヶ丘高等学校の校門で、目の前に広がる桜高を眺めながら俺は正直な感想を述べた。

「だな。廊下もフローリングだったし、校舎の中もかなり広がったしな。さすが私立って感じた」

隣にいる奈亮も同意し、俺に繋げて評価の感想を述べた。

「まあ、こんなところで立ち止まってたら入る人の迷惑になるから、敷地内に入ろうか」

「ああ。そうだな」

俺達は桜高の敷地に入ろうと足を動かそうとした瞬間、左から声が聞こえてきた。

「その人達どいてえ〜!!」

左を向いてみると猪突猛進の如く駆け抜けて来る一人の女子生徒がいた。

奈亮は軽やかに避けたが、俺は反応速度が遅かったせいでその女子生徒に轢かれてしまった。

「あいた!」

「…って！」

女子生徒とその場に倒れ、俺は背中を強打し、手に持っていたスクールバッグも少し離れた場所に落としてしまった。

「つてえな…」。おい、大丈夫か？」

俺は背中が痛くて仕方ない体を起き上がらせ、ぶつかってきた女子生徒の心配をする。避けられなかった俺が悪いしね。

「あわわわ…！だ、大丈夫です！す、すみませんでした！！」

女子生徒に怪我はなく大丈夫だったらしく、少し焦りながらも、しっかりと頭を下げて謝ってくれた。

「いや、そんな謝んなくていいよ。俺にも落ち度はあったから」

「何でもいいが、遼達の周りにギャラリーが出来てることを忘れんな」

「唯……何やってんのよ…」

「「えっ！？」」

奈亮の発言により少し焦り、周りを見渡して見ると十数人の生徒に囲まれていた。心なしか、大半の生徒は女子で、男子は四、五人しかいなかった。

そして、目の前にいる女子生徒は顔を真っ赤にして「本当にすみ

ませんでした。」と言ってメガネをかけた女子生徒と共に桜高へ入って行った。

「散々な目に遭ったな」

「うん。ていうか、背中めっちゃ痛え」

「ほら」

俺は背中中の痛みを訴えると、奈亮が手を差し出してくれた。その手を掴み、やっとの事で立ち上がる事が出来た。

「なっ!」

「遼?どうした?」

立ち上がり髪を整えようとしたら、髪の毛が背中中の半ばから腰辺りまでずたずたになっていた。という事は……。

「そんな…」

「そっか。遼は尖端恐怖症だからハサミを自分に向けられるのが怖いんだっとな」

「爪楊枝だって生まれてこの方使ったことねえよ!自慢じゃ無いけどな!」

「そっだな。自慢にならないな」

「にしてもどうしよう…。こんなになっただんじゃ、もうどうしようもねえよ…」

俺は自分の髪を見ていると、目頭が熱くなっていた。

「じゃあ、とりあえず髪を結ってみたらどうだ？それで多少はごまかせる」

仕方なく奈亮の案で妥協した。

近くに転がっていたスクールバッグを取り、バッグの中からゴムを取り出し、それで後ろ髪を纏めた。

「どう？」

「うん？ダメだな。これだけ髪が自由の利く縛り方じゃダメだ」

「じゃあ、どうしろと？」

「ポニテ」

「は？」

「ポニーテールにすれば良いと思う」

「出来る訳ねえだろ！恥ずかしいわっ！」

何を言い出すかと思えば…。前から言ってますが俺は男です。そんな女々しい野郎じゃありません！

「でも、そんなはずたの髪を晒し回るよりは良いと思うぞ」

「確かにそうだけど…」

「それにお前なら可愛いし似合うつと思っぞ」

「だ・か・ら！可愛いとか言われても全然嬉しくねえよ！！」

だが、確かに奈亮の言う通りなので、俺は渋々髪をポニーテールに結うことにした。

髪を少しずつかき上げていき、髪を縛りポニーテールにした。

「どう？」

「バッチリ似合ってる！」

「似合ってるか似合って無いかを聞いたんじゃねえよ！髪は不自然じゃないかを聞いたんだよ！」

「ごめんごめん。大丈夫だよ。跳ねてないから気にすんな」

「本当に？」

ちよつと信じられないのでまた問い詰めたが、奈亮は焦った感じでこつ言った。

「って！やばい！あと、10分もしない内に入学式前のHR始まるぞ！」

「マジ！？」

時計を見てみると八時半を回っていた。

俺達はクラス分けを急いで眺め、同じ三組だったことを喜びながら教室へ向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

その後、HRには間に合い、入学式も無事に終えた。そして、今は自己紹介と言っだるゝい消化任務なのだが、自己紹介に入る前にあった席決めでちょっと問題があった。右隣は奈良で何の問題もなく、嬉しいことだったのだが、左隣が問題だった。

何の因果か知らないが、左隣は今日の朝に俺にぶつかった女子生徒だった。

「私は『平沢 唯』って言います！」

そして今はその彼女の自己紹介の番だ。名前は『平沢 唯』と言う可愛い名前で、良く見てみると結構可愛い子だったりする。

「好きなことは家でごろごろすることです！」（キリッ！

そして、性格が残念だった。

「（そんなことや顔で言われても……）」

「そ、そう。とってもユニークな趣味してるのね……。」

先生も呆れながらそう言った。

「えへへ。そうですかあ？」

それなのに平沢さんは褒められてると勘違いして、照れていた。

「それじゃあ次、朱智君^{あけち}。お願いね」

遂に俺にも順番が回ってきた。何故か急に緊張してきたが、俺は立ち上がり勇気を振り絞って声を出した。

「俺は『朱智 遼』です。ここには先週引越してきたばかりなので、地元の事を良く知りません。なので、皆さんにいろいろとご迷惑をおかけすることがあると思いますが、精一杯頑張りますので、どうかよろしくお願いします」

すっかり言えた。と、自己紹介の余韻に浸ろうと思ったら隣の平沢から拍手が聞こえてきた。そして、その拍手が何故か教室中に広がった。恥ずかしさのあまり平沢にチョップをお見舞いした。

「あいた！」

「自業自得だバーカ」

俺は小声で平沢に言った。

「遼ちゃん照れてますな」

「遼ちゃんとか言っな。女の子っぽいだろ」

平沢の発言はスルーして、変な嫌な呼び方を言うから、やめるように言った。

「だって遼ちゃんは遼ちゃんじゃないじゃん」

「朱智君？平沢さん？自己紹介が進まないからちよっとその辺にしておいてくれる？」

平沢が意味不明な事を言った瞬間、先生に注意され、渋々黙る平沢。

「それじゃあ水河君。お願いね」

奈亮の番がきた。どんな自己紹介をするのかと思い、ワクワクしながら聞いた。

「俺は『水河 奈亮』って言います。特技は料理です」

という味っけない普通の自己紹介をして席に座った。

それから約20分後にクラス40人全員＋担任の自己紹介は終わり、桜高第一日目は終わった。

第一話『入学!』（後書き）

唯ちゃんの登場です！

本家よりゆるい唯ちゃんになっちゃった気がします、そこは愛嬌でカバーということでは…

第二話『部活!』（前書き）

三日連続更新!!

勉強以外にやる事が無くて暇ですw

第二話『部活!』

「うん…」

桜高に入学してから二週間ほど経ったある日、俺は自分の机の上に置いてある入部届と書かれた白い紙をな眺めがら唸っていた。

「なあ、遼は入る部活決まったか？」

そんな俺に対して奈亮が嫌味とも思える言葉を発してきた。

「見て分かれよ。やりたい部活は今のところ決まってないし、第一にやりたい部活がない」

まあ、俺はそんなこと全く気にしてないので普通の返事を返した。

「だよねえ」。遼ちゃんもそう思うよねえ」

隣で一緒に唸っていた平沢も俺達の話に乗ってきた。基本的に自由な校風の桜高なのでユニークな部活が数多く存在するが、どれも興味をそそらなかった。そして、元女子校だっただけあって運動部の方はあまり男子に人気な部活は存在しなかった。さすがにバスケットとバドミントン部はあったが。

「だいたい、オカルト研究会とか、ミステリー研究会とか、UMA研究会とか同じ様なやつがいっぱい在りすぎるし、心霊研究会とか、花火研究会に至っては『夏期限定』とかやる気なさすぎでしょ?」

「それに、文科系の部ってよく分からないよね?」

「確かにそれもある」

「「うん……」」

「ダメだこいつら……」

一緒にして唸り出した俺達を見て奈亮が頭を抱えた。

「そう言う奈亮は何か部活に入ったのかよお。昨日も俺と一緒に帰ったくせに」

「え？お、俺……？」

俺からの急な反撃に動揺する奈亮。その様子から自分の事は棚に上げていたらしい。

「なんだ。自分の事は棚に上げてたのか……。せこい男」

「うるせえー。やりたい事がねえんだよ」

本当に棚に上げていたみたいだ。にしても部活どうするか……。

「「「うん……」」」

「貴方達何三人で唸ってるのよ」

「あ、和ちゃん」

一人の女子生徒が俺達のところへやって来た。名前は『真鍋 和』

と言う。いつも平沢の近くにいる（まあ、平沢が近付いてるだけなのだが）ので、もう友達と言える存在になっている。

「いやあ、」

「それが」

「ねえ」

「貴方達普通に喋りなさい」

真鍋が多少呆れて言う。ちなみに、「いやあ、」は俺、「それが」は奈亮、「ねえ」は平沢が言った。

「実は、私も遼ちゃんも奈ちゃんもどの部活に入るかまだ決まっておらず、え！？まだ決めて無かったの！？もう学校始まって二週間が経つわよ！？」「」

平沢が話している途中で俺達は真鍋に怒られてしまった。

「でもでも私達、運動音痴だし、文科系のクラブだってよく分からないし…」

「おい平沢。それじゃあ俺達も運動音痴って事になってるぞ」

「はあ…。こうやってニートが出来上がっていくのね…」

「「部活やってないだけでニート！？」「」」

衝撃的な事を言われ、俺達は声を揃えてそう言った。そして、俺はそろそろ本当に危ないんじゃないかと思ってきた。

「奈亮と遼の事情は知らないけど、唯は一度も部活したことなかったんだから」

俺も中学の頃は何もしなかったのだが、この際どうでもいい。

「奈亮、俺達本気で考えなきゃまずくなってきたくないか？」

「そうだな。少なくとも平沢よりは早く決めないとな」

俺達は真鍋や平沢に聞こえない様に小声でそんなやり取りをした。

.....

昼休み。俺、奈亮、平沢、真鍋は四人仲良く昼ご飯を食べていた。

「という訳で、軽音部ってところに入ってみました!」

そんな中、平沢が不意にそんなことを言った。

「そうなんだ...」

俺は少し焦りながら言う。

でも、平沢に楽器なんて出来るのだろうか？

それにしても平沢がバンドかぁ。ギター持った平沢っていいな。

「それで、軽音部ってどんな事をするの?」

真鍋の質問に対して唯は、

「さあ？」

「つておい！知らないんかい！軽音部ってバンドやる部活だよ！しかも、軽音部は確かギタリスト募集してたぞ！？」

軽音部がギタリストを募集してたから、ギターを持つてる平沢を想像して「かっこいいな」と思ってしまった俺が馬鹿馬鹿しく思えた。

「ええー！？でも、私ギターなんて弾けないよ？」

「じゃあ、何なら弾けるのよ……」

「……………カ、カスタネット？」

リズム良くカスタネットを叩いている平沢を想像してみる。

「うんたん♪うんたん♪」と、楽しくリズムを刻みながら笑顔でカスタネットを叩く平沢……。

「……凄く似合うな（わ）」「……」

真鍋と奈亮も同じくそうだった。俺と同じくカスタネットを叩いている平沢を想像したのだろう。

そんな俺達の冷やかに平沢は「そう？照れちゃうなあ」と言っていた。それを見て俺達は、

「「「はあ……」」」

と、溜め息を吐くしかなかった。

結局平沢は軽音部を退部する事を決め、放課後に軽音部の人達に伝えに行くらしい。

第二話『部活!』（後書き）

ちょっと短くなってしまってますみません…

次回は長くなる様に頑張ってみます！

第三話「退部!？」（前書き）

情報処理の時間にかきかきして、やっと更新できました！

昨日、更新したかったんですけどね…

第三話「退部!？」

「さて、放課後になったし、一緒に帰るか」

「うん」

先程、数学とか言うこの世界最大重要教科の授業から解放され、放課後になった。奈良からの誘いに俺は頷き、颯爽と爽快に教室を出ようとした。

「遼ちゃん！奈ちゃん！助けてえ〜！」

そんな俺達を引き止めようと小走りでこちらへ来る平沢。そんな光景を見た俺は直感的だが、嫌な予感がした。

「うえ？」

その予感が的中し、平沢は机の脚に躓き、そのまま倒れそうになった。

「おっとつと…」

そして、ケンケンの要領で足元を見てバランスをとりながら俺達に寄って来る。

「つとつとつて！うえ!？」

「は!？」

目の前で止まると思っていた俺だが、その勢いは止まることなく、

予想に反して俺に突撃してきた。

「あいて！」

「ぐふっ！」

咄嗟に避けようとしたが、コンマ一秒の世界で人間が動ける訳がなく、俺と平沢は激突した。入学式にもこんな事があったあの心の隅で思いながら俺はその場に倒れた。

「う、こめんねっ！？ 遼ちゃん大丈夫！？」

平沢が俺を気にかけて言葉をかけるが、当の本人である俺は後頭部を強打し、軽く脳震盪を起こしていた。

「あゝ… 大丈夫に見えるなら眼科へ行っただろうがいい…」

俺は少し悪意を込めていったが、平沢本人は少し驚き気味に「え？ じゃあ、帰りに眼科寄らなきゃ！」と言っていた。……いい加減こいつぶん殴って良いかなあ？

「ほら、本当に大丈夫か？」

奈亮が手を出してくれた。未だにぐらんぐらん揺れる頭を押さえながら、無言で奈亮の手を掴んだ。すると、奈亮が手を引き、俺を立ち上がらせる。

「うあ… 目眩がする…」

立ってみると大分楽になったが、目眩がひどく、気持ち悪い。

「ホントにごめんね…！ 遼ちゃん死んじやだよお…」

「勝手に人を殺すな！」と言いたかったが、いまはそんなことどうでもいいくらいに頭が痛かった。だが、平沢は半ば本気で涙目になっていたので俺は平沢に優しく声をかける事にした。

「大丈夫じゃないけど、あんまり心配しなくていいよ。避けられなかった俺が悪いし…。というか、何か用があったんじゃないの？」

入学式の時も俺が譲歩したが、俺って実は押しに凄く弱いのか？ そんなことを思いながら俺は話を切り替えた。

「うん、そうなんだけど… 遼ちゃん本当に大丈夫？」

未だに平沢は心配していた。このままじゃラチがあかないので、

「もう大丈夫だよ」

という事にした。

「なら良いんだけど……」

だが、平沢はまだ納得いかない様子だった。

「大丈夫、大丈夫だから」

俺が念を押すと、

「本当に？」

と言ってくる。平沢は意外と心配性らしい。というか、ついさっき俺が大丈夫だと思ってたじゃないか。どいう風風の吹き回しまわしだよ…。

「ホントホント。もう大丈夫だつて」

「なら良かった」

やっと平沢が笑顔になつてくれた。なんか、平沢はいつも無邪気な笑顔で笑つてゐるから、その顔を悲しみの色に変わるのは何故か嫌な気分になる。物凄く罪悪感が生まれるのだ。

そして、気が付くと頭の痛みも消えていた。

「で？なんの用だよ」

というか、帰ろうとしていたところを呼び止められているので実際は早く帰りたいのが本音な訳で、用があるならさっさと済ませてしまいたい。

大体は想像出来るが…

「じ、実は…軽音部の人達に「退部します」って一人で言うのが怖くて…。だから、一緒について来て欲しいなあ…って…」

平沢が両手の人差し指同士を付けながら少し上目遣いに言ってくる。感想を言つと凄く可愛かった。まあ、本人には言わないけど。

「俺はいいけど、奈亮はどうする？」

でもまあ、友達の頼みを断るような心の狭い奴では無いので、平沢の頼みに頷く。

「いや、俺は夕飯の買い物したり洗濯したりで忙しいから無理だな」

「そっかあ…残念…」

「じゃあ、俺は先帰るぞ」

「うん」

俺は奈亮を見送ると、平沢と一緒に軽音部の部室である音楽室へ向うことにした。

「んじゃ、行くか」

「うん！」

・・・・・・・・

「こ…怖いよう…」

「あのなあ平沢、歩き難い事この上ないんだけど…」

今は音楽室へ向かう際に通る事になるこのオカルト研究会やらUMA研究会やらの色々とそれ関連の部室が連なる廊下にいるのだが、どうやら平沢はそれらが怖いらしく、俺に抱き着きながら覚束ない足取りで進む。

「だつてえ…」

「はあ…」

俺はいつこうに離れようとしないうちに平沢に対して溜め息が出た。この状況は嬉しいんだが、実を言うと俺も内心かなり怖がったりする。

「ほら、後は階段上がるだけだからいい加減離れろ」

「もう少しこのまま…」

急に機嫌を良くし、俺の頭を撫でだした。いや、いいんだけど、絶対に人に見られたくない絵だったりする。

「あ、貴方達…仲良いのね…」

「あ、いや…これは…」

「あ、先生だ」

今、この状況を音楽の山中先生やまなかに見られてしまった。

「音楽室へ行くの？」

「はい」

「俺はこいつの付き添いです」

「そう。音楽室はここを上がってすぐだから。あと、くれぐれも校内でそんなことしない様にね…」

山中先生はそう言つと階段を下りていった。

「ほら行くぞ」

「うん！」

平沢はやっと俺から離れてくれた。

階段を上がり、音楽室の前に来ると平沢は少し浅く深呼吸をした。

「ふう…よしっ！」

そう言つて音楽室のドアに手をかけようとしたら、何故かその手を止めた。

「あわわわわわ…」

すると、何故か困惑したかの様に声を上げる。いや、困惑してるのか…。

「どうした平沢？」

「どうしよう…」

平沢がそう言った瞬間、うしろからやって来た女子生徒が平沢の肩をポンと叩いた。

「ひいいい！ー！」

何故か平沢は大声をで叫び、この世の絶望でも見たかのような涙目になり、「違います違います……」と息継ぎをせずに何度も言っていた。

そんな平沢を見て俺はこう思った。

「（平沢って肺活量凄いな）」

「あ、天然でテンポが悪くて使えないドジっ娘！」

女子生徒は平沢の顔を見るなり物凄く失礼な事を言った。否定はしないけど…。

「あ！もしかして貴女が入部希望の平沢 唯さん？」

「え！？は、はい！そ、そうです！！」

実際は退部希望だけだな。

「そつかあ！色々と誤解してごめんね！ギター物凄く上手いんだってね！来てくれるの待ってたよー！！」

平沢に在らぬ尾びれがついていた。

「君も？」

「いや、俺は「入部希望！？ホントに！？やったあ！これで数が揃ったよ！」……………おい……」

俺はこの女子生徒のマシニングトークについていけなかった。

「みんな！入部希望者が来たぞ！しかも二人もだ！」

女子生徒は音楽室のドアを勢い良く開けるや否や、笑顔で音楽室にいた女子生徒二人にそう言った。

「本当か！？」

「まあ！」

女子生徒二人は目を輝かせ、こちらへ顔を向ける。

「歓迎しますわー！」

歓迎されてしまった。

「ムギ、お茶の用意だ！」

「はい！」

ムギと呼ばれた女子生徒は多少の急ぎ足でティーセットの置いてある机へ向かった。

「ほら、二人とも座って座って！！」

突然な事にポカンとしている俺達を音楽室の窓際近くにある席に座らせられ、目の前に紅茶とケーキが置かれた。

「（ここは本当に軽音部なのか？）」

俺は心の中でそう思いつた。本当に平沢が退部宣言が出来るのか

心の底から心配になって来た。

第三話「退部!？」（後書き）

だんだん遼くん言葉遣いが丸くなってきた？

男の人の口調って難しいです…

第四話『退部！？』（前書き）

少し時間がかかってしまいました！

未だにアニメの1話が終らない…

では、本編をお楽しみ下さい！

第四話『退部!?!』

目の前に紅茶と高級感漂うケーキが置かれて、俺はかなり困っていた。本当に食べてしまつて良いのか…。

「はむっ……おいしい♪」

だが、平沢は何の躊躇いもなく、ケーキを美味しく頂いていた。

「軽音部……辞めるのやめようかなあ」

平沢は隣にいる俺にしか聞こえない声でそう呟いた。

「あの…食べて良いんですよ?」

俺の席の対角線上に座っていた、ムギと呼ばれていた人が俺にそう言った。

「は、はい…そうですか…」

押しに弱い俺は『NO』と言えず、頷いてしまった。

ひとまず、平沢が動くまで俺はちびちびケーキを食べる事にした。少量のケーキを食べた途端……

「…!!???」

あまりの美味しさに目を丸くしてしまった。高級感漂うケーキなんてものじゃなかった!これは正しく高級なケーキだ!!平沢があ

んなに幸せそうな顔をする訳だ。

「もしかして、お口に会いませんでした？」

心配そうな顔をしながら俺の顔を伺うムギさん。

「いや、素直に驚いただけですよ。それに、このケーキ本当においしいですよ」

「そう？ならよかったあ！」

ムギさんは両手を合わせ、喜びの声を上げる。

「平沢さんと……えつと……」

俺の正面に座っている女子生徒が少し戸惑った表情で俺を見ている。多分、俺の名前を言いたいのだが分からないのだろう。

そこで俺はこんな提案をした。

「なあ、軽音部さん。お互いの名前が分からないのは何かと不便だから、自己紹介をしないか？」

「ああ、それがいいな。ありがとう。気を利かせてくれて」

その提案に正面の女子生徒は頷き、それに続き他のみんなも頷いたので、自己紹介が始まった。

「じゃあ、まずは部長のあたしからだな！」

音楽室前の廊下で会った女子生徒が座っていた席から立ち上がり、高らかに声を上げる。

「あたしの名前は『田井中^{たいなか}律^{りつ}』。パートはドラム担当で、軽音部の部長だ！これからよろしく！」

田井中さんがそう言うのと、次はムギさんが立ち上がり、自己紹介を始めた。

「私は『琴吹^{ことぶき}紬^{つむぎ}』と言います。私の事は親しみを込めて、『ムギ』と呼んで下さい。パートはキーボード担当です。これからもよろしくお願いしますね♪」

ムギさんが笑顔で言い席に座ると、正面に座っていた女子生徒が立ち上がった。

「私は『秋山^{あきやま}澪^{みお}』だ。パートはベースで、律とは幼なじみだ。二人ともよろしく」

言い終わり、秋山さんが席に着く。お次は平沢が立ち上がり、自己紹介を始めた。

話し合いも無しに勝手に始めるとは…。まあ、話し合ったところで平沢に先にやって貰っていただろうから、別に気にはしないのだが…。

「可愛いものなら何でも好きです！」

出番が回って来たので席を立つ。みんなの視線が俺に集中する。

「俺は『朱智 遼』って言います。こんな容姿をしていますが、れっきとした『男』です！そこのお間違えなく」

「……は、はい……」

自分が男だという事を強く言うと、平沢達は怯えた様に縮こまった。

「それで、秋山さん何か言いたい事があつたんじゃないんですか？」

「あ、そうだな。平沢さんと朱智さんはどんな音楽がやりたいんだ？」

「……あ……えつと……」

平沢と声が重なってしまった。いや、それは決してまずい事ではないのだが、実を言うと、自己紹介のくだりが間接的に「入部します」と言っているようだったので、ここに来た当初の目的を綺麗さっぱり忘れていたのだ。

「あの、俺、実は入部希望者じゃ無いんですよ？平沢の付き添いで」

「……え……？」

空気が凍り付いた。

「う、嘘だろ！？入部希望者だと言ってたじゃん！！あれは嘘だったのかっ！」

田井中さんが抗議の声を上げたが、その話が嘘ですよ？

「俺は一言も入部希望者とは言っていないのですが」

「……………あ、確かに言って無いな」

「律！！」

「いだっ！」

俺が真実を述べると、田井中さんは秋山さんの鉄拳制裁を受けた。

「だいたい、紛らわしいんだよ！あんなところに居たら、入部希望者と間違えられて当然だろ！？」

「だとしても話を聞け！」

「あいで！」

逆ギレをされたが、秋山さんが御尤もな事を言って、田井中さんに鉄拳制裁を放った。

「で、でも平沢さんは入部希望者なんだよね！？」

「えっ？あ…は、はいっ！」

「違っだろ！」とは言えなかった。もしかしたら、考え直して軽音部に入る事にしたのかもしれない。

「じゃあ、平沢さんはどんな音楽をするんだ？」

「え、え〜つと…」

「まさかとは思うが、辞めるのに入部希望者って言ったんじゃないだろうな」

俺は小声で平沢に呟いた。

「うん…。ど、どうしよう…。今は物凄く言い出しづらいよ…」

「俺も言っただから頑張れ」

「うん…」

「好きなバンドとか無いのか？好きなギタリストは？」

そういえば平沢ってギターが上手いって尾ひれが着いてたな。全くできないはずだが…。

「あ…えと、じっ、じっ、じっ」

「ジミ・ヘンドリクス？」

「おお！」

「え？ち、違っ…じっ、じっ、じっ」

「ジミ・ペイジー？」

「おお！…！」

「違っ…じっ、じっ、じっ」

「ジェフ・ベック!!??」

「そっか!!ジェフ・ベックか!!」

話を聞けよ軽音部!!明らかに平沢が困ってるだろ!!?平沢は「実は」って言いたいんだよ!きつと…。

しかし、疑問になった事がひとつ。

「ジェフ・ベックって誰?」

「『ロックギタリストには二種類しか居ない。ジェフ・ベックとジェフ・ベック以外だ』って言われている、常に新しいサウンドを追求する挑戦的なギタリスト!」

「へえ。それは凄いギタリストですね」

「さすが!渋いねえ!平沢さん!」

「あは…あはははは〜!」

平沢が棒読み且つ、苦しそうに笑みを浮かべる。もう限界が来たらしい。

「平沢さんみたいな人が入部してくれてホントに助かったよ〜!」

「あと一週間以内に二人も入部してくれないと廃部になるんです」

「だから、今は一人でも部員が欲しいんだ」

そうだったんだ……。だから、新入部員が来たっただけであんなに喜んでいたのか。だけど――

「あ、あのっ！！」

当然立ち上がる平沢に軽音部の視線が一気に集まる。

「あのっ！申し訳無いんですけど、実は『入部するの辞めさせて下さい』って言いに来たんです！」

そう平沢は言った。

「「「え？」「」」

また凍り付く空気。

「私、ギター弾けないし……それに、もっと違う楽器をやるものだと……」

「じゃ、じゃあどんな楽器なら出来るの？」

ムギさんが言う。

「カスタ……はっ！ハーモニカ！」

当然閃いた様に平沢は平気で嘘をついた。いや、実は出来るのかもしれない。

「あ、ハーモニカならあるよ。吹い「すみません！吹けません！」」

「変な見栄張るな」

「いたっ」

俺は平沢の頭に軽くチョップをした。

「でも、うちの部に入ろうとしたってことは音楽には興味あるのよね？」

「他に入りたい部活とかってあるの？」

「特には何も…。本当にすみません。遼ちゃん帰ろうか」

「あ、ああ」

俺達は自分の意志を貫き通した。でも、何だろう…。物凄い罪悪感がある。

「も、もうちょっと待って！」

「もう一杯お茶はいかが？」

「いえ、結構です」

俺は丁重に断った。

「クッキーとマドレーヌもあるのっ！」

相手も負けじとお菓子で釣ってきた。さすがに、これには平沢も足を止めてしまう。そう思った。

「ごめんなさい……私、もう帰ります……」

しかし、平沢は断った。

まさか、と俺は思った。いや、軽音部の人達もそうだろう。

あの平沢が、何よりお菓子を優先していた平沢が断ったんだ。

「そう……」

ムギさんが残念そうに言い、俯いてしまった。

「……」

重たい沈黙の中、不意に俺は声を出していた。

「一日……」

「……え?」

「一日時間を下さい。俺の知り合いに入ってくれそうな奴がいます。そいつが入るって言うたら俺も入部します。なので、一日だけ時間を下さい」

そう言って音楽室を出た。もちろん平沢と一緒に。

何を言ってる。そんな奴、誰も知らないじゃないか。冗談も休み

休み言えよ俺…。

そんな事を思いながら、俺は平沢と一緒に帰路に着いた。

第四話『退部！？』（後書き）

はい、最初のオリジナル展開です！

さて、次回はどうなる事やら…

と、そうそう。皆さんにアンケートを取らせて貰います。

主人公の名前を変えたいんですけど…どうですかね？

読んでいる方々は感想やメッセージでお答えくれると嬉しいです

ちなみに、『^{かなで}奏』に変えようと思っています

第五話『決意!』（前書き）

5000PV、1000ユニーク突破!!

皆さんありがとうございます、

第五話『決意!』

「ねえ、遼ちゃん」

「なんだ？」

帰り道。カンカンカンと鳴る踏切の前で電車が通過するのを待っている。学校を出てからずっと続いていた沈黙を平沢がついに破った。

「私、本当に退部してよかったのかな？」

不意に平沢がそんな事を言う。でも、平沢はギターが…いや、軽音楽に使う楽器を弾く事が出来ないじゃないか。

「私ね、今すつつつつつごく後悔してるの。ギターが弾けないからって退部したこと」

「なんで？平沢はギター弾けないだろ？」

「うん」

「じゃあ、入部しても迷惑なだけだろ？」

「私、小さい頃から今までずっとボーツと過ごして、何も打ち込める事が無かった。そしてね、高校生になったら何か変われるかなって、そんな事思ってたんだ…」

平沢の表情がだんだんと曇ってきた。

「だけど、実際は何もできなくて、時間だけが過ぎて……いつの間にかもう四月も終わりがけてる……。結局、私って何も変わらないのかな……」

平沢の目から何粒かの涙が頬をつたう。それを自分の手で払い、話を続ける。

「ギターが出来ないから退部なんて、私自身が変わるのが怖かっただけなんだよ……。しかも、そのせいで軽音部が廃部になっちゃうかもしれない……。遼ちゃんがりっちゃん達に言った言葉だって、私の罪悪感を少しでも緩めようとして吐いた嘘だし……」

平沢にばれてらっしやる。

「……遼ちゃんの他の友達って奈ちゃんしか居ないし……」

「失礼だな！おいつ！」

そう言つと、平沢は俺に抱き着いてきた。

「あの……平沢？」

むっちゃくちや恥ずかしいんですが……。

「もうちょっと……ぐすっ……このまま……うっ……」

俺達の目の前を電車が駆け抜けて行く。物凄く申し訳なさそうに……。

「変わりたいよう…。今の私に何か出来る事が欲しいよう…。高校生も何も出来ずに終わっちゃうなんて嫌だよう…。何かしたいよう…。でも…。何をしたいかわかんないんだよう…。！！」

「平沢…」

平沢はそう言う「うわああああん！」と、子供のように泣き喚き始めた。そんな平沢を見て、俺は何も声をかける事ができなかった。どんな言葉をかけてあげればよいのかわからなかった。自分の不甲斐なさ嫌になった。今の俺は平沢が泣き止むまでこうして抱きながら頭を撫でる事しか出来ない。

「（平沢はこんなんだけど、俺には出来る事があるんだ。今は平沢が泣き止むまでこうしてるのが、今の平沢に対しては良い方法だろう）」

・・・・・・・・・・

平沢はあれから30分弱はただただろうか。平沢はようやく泣き止み、俺から離れた。しかし、未だに平沢の表情は曇っていた。

「遼ちゃんは…。何か打ち込める事ってあった？」

不意に平沢はそんな事を言った。だが、俺も平沢と正反対の位置に居たが、平沢と同じだった。「平沢は俺に打ち込める事があったかを聞いてきてよかった」と心の中で呟きながら答えた。

「いや、何も無かった。平沢と同じだよ」

そう。打ち込める事なんて無かった。

「じゃあ、何かやりたいと思う?」

「さあね、わからないな。でも、今やりたい事ならある」

「…どういう事?」

「平沢のやりたい事を見つけない」

俺は何故かそう口走っていた。

「え?」

「は?」

俺と平沢の疑問の声が重なった。実際なんでそんな事を言ったのか全然わからなかった。

「遼ちゃんて優しいね。そう言ってくれて嬉しいよ!」

「あ、ああ…」

俺の「は?」発言は聞こえていなかったらしく、平沢は嬉しそうに笑みを浮かべた。いや、本当に嬉しかったんだな。それに、今の平沢の笑顔は反則的に可愛かった。

「なあ、平沢。それでどうするんだ?平沢のやりたい事を見つけるには――」

と、そこまで言うと、平沢の人差し指が俺の口を止めた。

「『唯』って呼んで」

「へ？」

俺は何ともマヌケな声を出していた。

「『唯』って呼んで」

平沢はいきなりそんなことを言い始めた。

「あ、あの…平『唯！』いや、だから…ひ『ゆ！い！』はい…唯さん」

「『唯』だよ！私の名前はそんな化学物質みたいに言わないでよ！」

「わかりました…」

唯酸…なんか、響きが柔らかいせいか、全然弱そうな酸だな…。
というか、唯ってこんなに強情な性格だったか？

「ゆ、唯…」

「うん」

俺が平『唯』の名前を呼ぶと、満面の笑みを唯は俺に向けた。
少し前に本当に泣いていたのか、と思ってしまうほどの笑顔だ。だが、泣いていた名残としてか、目元が少し赤い。唯の顔には本当に泣いていたという証拠がしっかとあった。

「唯は、これから何をするんだ？　どういう事なら出来る？　そして、
どういう事が好きなんだ？」

話が逸れてしまったので、俺は話を戻した。

「遼ちゃん。今から音楽室に戻る気、ある？　私ね今は音楽室に戻って、りっちゃん達にまた謝りに行きたいんだ」

「今は唯の為に動いてやるんだから、行く気が無いなんて言うわけないだろ。何処だっけ行ってやるよ」

「遼ちゃん……ありがとう！」

「ほら、行くぞ！」

「うんっ！」

「（我ながらよくあんな恥ずかしい事が言えたものだ。傍から見たらただの痛い奴だよな。俺って）」

と、俺は心の中で思った。だが、実際には自分の容姿に似合わない言葉を吐いていたのだ。しかし、その事に気づくことは一生無かったとさ。

・・・・・・・・・・

「ま、当たり前って言えば当たり前か……」

「うん……」

俺達は音楽室の前で黄昏れていた。完全下校時刻まであと30分

はあるから大丈夫だと思っていたが、そうはいかなかった。軽音部の田井中さん達は帰ってしまったていたらしく、鍵がかかっていた。唯はまた泣きそうな顔に戻ってしまった。

しかし、俺も期待値が大きかった分、精神的ショックがかなり大きかった。

「まあ、いつまでも此処に居ても誰も来ないんだから帰るぞ」

「うん…」

俺達は明日また音楽室（い）に来ることにして階段を下りようとした。

「WA・WA・WA忘れもの〜と……お、平沢さんと朱智さんじゃん。音楽室に忘れ物でもした？」

歌いながら田井中さんが目の前に現れた。

コマンドは？

- ・蹴る
- ・蹴る
- ・蹴る

「なんだよその選択肢の少なさは！！あたしに嫌味でもあんのか！！」

「いや、田井中さんに会えた事がとにかく嬉しくてラリってました。すみません」

「何！？そんなことを言われても困るぜえ！そんなにあたしに惚れたか？」

「いや、そういう意味で言った訳じゃ無いです」

田井中さんが甚だしいまでの勘違いをしたので、俺は訂正した。

「唯が田井中さん達に用があつたんですよ」

「りっちゃんっ！！」

「うおうっ！ひ、平沢さん！？」

唯が田井中さんに抱き着いた。その行動に少し戸惑う田井中さん。

「会いたかったよ」

「唯、田井中さんが困ってるからやめろ」

「あ、ごめんなさい。嬉しくてつい…」

唯が田井中さんから離れると、田井中さんはパンパンと唯が抱きしめた際についたブレザーのしわを伸ばす。

「で？平沢さんは何しに来たの？あ、もしかして退部するの考え直してくれた！？」

田井中さんが期待しながら目を輝かせた。だが、残念ながら唯はただ謝りに――

「うん！私、軽音部に入るよ！！」

唯の声は誰も居ない廊下に結構良く響いた。

「遠ちゃんが励ましてくれたからね！それに、そうした方が良いとも言ったし！」

そう。唯の言う通り、ここに来る前に走りながら唯のやりたい事を見つけてやったのだ。「私、ギター始めるよ！そして軽音部にも入る！！」と、唯はちゃんとそう言ったのだ。

「やったあああああ！！平沢さんありがとう！ありがとう！！」

田井中さんが唯の手を掴んで何回も上下に振る。

「さて、用も済んだし、もう完全下校時刻だし、帰るか」

階段を下りようとしたら田井中さんに肩を掴まれた。

「待つよろし」

「何で片言なんですか？」

「あと一人部員が足りないんだ。だから、入って。いや、入れ」

俺が田井中さんにターゲットにされた。

「あ！待てゴラァ！！」

俺は逃げた。が、すぐに捕まった。

「はいキャッチ♪」

「…はあ」

俺は小さく溜め息を吐いた。

逃げた先にはムギさんが居たのだ。そして、呆気なく俺は御用となった。実際に警察に捕まった訳では無いのだが。

「ナイスだムギ！」

もうこうなったらどうにでもなれだ…。

「入れば良いんだろ…」

口調が素に戻ってしまった。まあ、唯には素だったので違和感は無いと思うが。

「よし！軽音部の廃部の危機は去った！！よっしゃーっ！！」

田井中さんが嬉しそうにガッツポーズをとる。

「何があつたんだ？」

俺が逃げた先に居たムギさん達は状況を掴める事が出来ていなく、クエスチョンマークを浮かべていた。

「零！ムギ！聞いてくれ！平沢さんと朱智さんが考え直して、軽音

部に入部する事になったんだ！」

「今度こそ本当か！？嘘じゃないんだな！？」

「本当本当♪」

「まあ！」

「よかったあ！」

何が考え直しただ。俺は半ば強引に入れられたぞ。

まあ、部活つてのはみんなとワイワイ楽しくやるのが醍醐味だからな。唯も居るし大丈夫だろう。中学の頃みたいに酷くはならないだろう…。

「（あゝやだやだ。何でこんな時にあんな事思い出すかなあ…）」

「遼ちゃ〜ん！みんなで記念写真撮るよ！こつち来て〜！」

音楽室の前で唯が手を振って俺を呼んでいた。

「これはこれで良い人達に恵まれたな俺…」

中学時代があんなだからこんな事思うのだろうと思い、俺は唯達の元へ足を運ぶ。

少し目頭が熱くなり、涙が溢れそうになったが、気合いでなんとかした。

「遼ちゃんこっちこっち！私の隣だよ」

音楽室に入ると唯達が各々の配置に着いて俺を待っていた。

俺は唯の隣に行くと、田井中さんが「はい、チーズ！」と言ってシャッターを切った。

「唯…」

「何？」

「まあ、お熱いですねえ」

シャッターが切られる少し前に唯に抱き着かれたのだ。田井中さんには誤解される始末だ。

「（まったく、何考えてるんだか…）」

俺は唯の事がますますわからなくなってきた。だが、不思議と明日が待ち遠しくなった気がした。

俺は唯と一緒に部活をやる事が待ち遠しくなっていたのだ。

第五話『決意!』（後書き）

さて、やっとアニメ1話の終わりです…

さて次回は2話に入ります！

第六話『楽器！？』（前書き）

オリジナルストーリー＋アニメ第二話の冒頭です！

では、本文をお楽しみ下さい！

第六話『楽器！？』

今日の夕飯はハンバーグだ。しかも、奈亮が腕を振るって作った自信作だ。見ていると口の中に涎が溜まる程食欲をそそり、ハンバーグの匂いに腹の虫が鳴りそうになったが、気合いでどうにかした。

「ホントに奈亮と居れる俺は幸せ者だよ」

「そうか？つてかさ、早く着替えて食べようぜ？ハンバーグが冷める」

「あ、ごめん」

奈亮は律儀に俺が帰って来るのを待っていたらしく、奈亮はまだ夕飯を食べていない様だった。というか、見た感じさっき出来たばっかだから、あまり待ってはいないだろう。

俺は奈亮を待たせては悪いので、急いで部屋に行き、制服から部屋着に着替えた。

着替えた俺を姿見で見る。

そこにはいつもと変わらぬ女の子みたいで俺が立っていた。きっと、街頭アンケートで男か女か聞けば、ほとんどの人は女と答えるだろう。俺の容姿はやはり女そのものだと思ってしまう。どんな部屋着を着ても女の子に見えてしまう。このＴシャツだっておとこの日曜日に買って、初めて着るシャツだ。しかし、女の子に見えてしまった。やはり、少なくとも髪の毛の長さをどうにかしなければならいようだ。だが、それは論外。諦めしかない。俺はまだ髪を切るな

んて所業は無理だ。

「はあ……」

毎日。毎回の如くこの姿見で自分の容姿を確認するとため息が出てしまう。

しかし、そんな事で悩んでると夕飯を待たしている奈亮がもうそろそろ愚痴を言ってきそうなので、俺は自分の部屋を後にした。

「お待たせ」

「また部屋着買ったのか。似合ってるな。まあ、ファッション企業の人っぽく言っと、遼は素材がいいからな」

「そう？そうでもないよ。まあ、お腹減いたし、食べるか」

「そうだな」

俺は夕飯が用意されている、奈亮の向かい側の席とに座る。

「いただきます」

二人で声を揃え、ハンバーグを一口食べる。美味しい……。肉の味がとろける様に口一杯に広がり、ほのかにしゃきしゃきとした玉葱の甘味が肉の旨さに合い、美味しさが増す。さすが奈亮……。どんな料理も一級品だ。

「そつだ！軽音部入ったからさ、」

「よしっ！俺も軽音部入るぞ！」

「なんでそうなるんだよ……」

俺が軽音部に入ったと言うと、奈亮は目の色を変えてそう言った。実はあの後、唯達と一緒に帰る事になったのだ。その途中、俺と唯は何のパートをやるかという話になり、俺と唯は、まあ、当たり前如くギターをやることになったのだが……。

「大丈夫大丈夫。俺はベースなら出来る」

「そういう意味じゃなくて……話聞こうよ。『軽音部に入ったから、ギター売ってる場所知ってる？』って聞こうとしたんだけど……」

そう。引越して来てようやく1ヶ月が経とうとしている場所に何があるかは、まだあまり分らないのだ。しかし、奈亮は元からこの近くに住んでいた為、ここら近辺の地理には詳しいはずだ。

「なるほどね。それなら『10GIA』って店が有るぞ。ここから30分程歩けば商店街があるだろ？そこの近くだ」

「そうなんだ。んじゃ、今度一緒に行こうよ」

「そうだな。次の休みの日に一緒に行くか」

「うん！」

奈亮と楽器屋に行くことを約束し、そのまま夕飯を食べ終え、自分の部屋に籠った。

ぴろりろり〜ん♪

「ん？」

部屋に入ると同時に唯からメールが届いた。

from:平沢 唯

件名:明日は楽しみだね!

本文:『遼ちゃん、今日はありがとう!遼ちゃんのおかげでやりた
いことを見つけたことが出来たよ!本当に本当にありがとう!!』

明日からの部活楽しみだね!

ムギちゃんどんなお菓子持ってきてくれるかな?本当に楽しみだね!

そうそう、遼ちゃんいつか私の家に来てよ!今日のお返ししたいか
ら!絶対に来てね!!』

どうやら唯は部活というよりはムギさんが持つてくると言ってい
たお菓子に興味があるみたいだ。部活は二の次らしい。

俺は唯のメールに対し、『お菓子よりも大切な物があるだろ。ま
あ、今日は色んな意味で俺もたすかったよ。ありがとな!唯の家
に気が向いたら行くよ。じゃあまた明日な』と返すと、俺はベッ
ドにダイビングして、そのまま眠りに就いた。

.....

ピピピッ！…ピピピッ！…ピピピッ！…

毎朝恒例の聞き慣れたうるさい電子音が部屋中に鳴り響く。俺はいつものように枕元へ手を伸ばし、うるさい電子音を消す。

「ねむ…」

昨日はいつも以上に、精神的にも肉体的にも疲れたせいか、8時くらいに寝たのにも関わらず、全然疲れが取れていなかった。それに眠い…。

俺は重たいまぶたを開き、体を起こしてベッドから降りる。

「にゅへ〜…つとおう！？」

目眩…というか、立ちくらみに襲われた俺は、その場にぶっ倒れそつになったが、間一髪のところでなんとか持ち堪えた。

昨日は風呂に入らずに寝てしまった為、俺は汗くさくなってしまい、おまけに髪がべとべととして気持ち悪い。

「風呂入るか…」

俺は不快感を纏う自分の体を洗い流す為、風呂場へ向かった。風呂場まで歩く途中、少しだけ違和感があることに気付いた。

「奈亮、まだ寝てるのか…」

時刻は6時半ちょい。いつもなら、奈亮が朝食の支度を整え、洗い物をしている時間だ。珍しい事もあるんだなと俺は思い、奈亮を

起こす為に、奈亮の部屋へ寄った。

奈亮の部屋のドアを開け、部屋の中を確認する。奈亮は自分の机に突っ伏して寝ていた。その横には白い紙が置かれていた。その紙の正体に興味を持ち、部屋に入り奈亮の机に向かう。

「入部届か…。そういや、昨日軽音部に入るって言ってたな。あれ、本気だったんだ…」

奈亮の入部理由には『友達が入ったから』と書かれていたが、4行目辺りまで消しゴムで消した痕が残っていた。奈亮は意外にも優等生なので、こんなストレートな文を書くとは思わなかった。意外な一面を発見することが出来た。

「奈亮…。朝だぞ…。起きろ…」

奈亮の肩をぐらぐらと揺らす。

「知ってるか。偏頭痛はアイスクリーム頭痛より痛くないんだぜ」

「知らねえよ！早く起きろ！」

「あいた！」

奈亮が寝言で意味不明な事を吐かしたので揺さ振りからぐーパンチに変え、文字通り叩き起こした。

「奈亮おはよう」

「起こし方ってものがあるだろうが。そんなに気に食わなかったか？アイスクリーム頭痛」

「わざとか！てゆうか起きてたな！」

「いやあね？遼が何しに来たかと思えば、人の入部届の内容を盗み見て、そしたら、微笑みながら入部届を置いて、俺を起こそうと俺を揺さ振る。それをもっと味わいたい訳よ。分かんないかな」

「いや、分かんねえよ。つか、早く朝食作って」

「はいはい」

俺は奈亮を起こしたので、風呂場へ向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

時は過ぎ、今は放課後。この表現便利だなと思いながら、唯、奈亮と一緒に音楽室へ向かった。

「奈ちゃんも一緒に部活」

唯は凄く上機嫌らしく、鼻歌混じりで俺の隣を歩いていた。

「こんにちはー！」

「失礼します」

「ちいっす」

ガチャリと音楽室のドアを開けると、田井中さん、ムギさん、秋山さんの軽音部メンバーが揃っていた。

「よう！」

「こんにちは」

「いらつしゃい」

俺達に挨拶を返した軽音部メンバーだったが、奈亮の存在に気付くと、「どなた？」と軽音部を代表しムギさんが聞いてきた。

「えっとね、この人は『奈ちゃん』と言ってね、遼ちゃんといつも一緒にいるアホな人だよ！」

「お前に『アホ』って言われたくねえよ！」

「まあ、確かにアホだな」

うんうん、と頷く俺。その光景を見ていた軽音部の人達は「あははは！」と笑っていた。そんな力オスな自己紹介を一度白紙に戻し、改めて奈亮が自己紹介をした。

「初めまして。『水河 奈亮』って言います。ベースなら少しだけ出来ます。今後ともよろしく」

てな感じで奈亮の自己紹介も終わり、未だにドアの前にいた俺達は席に着いた。

「紅茶は熱いのと冷たいのどちらが良いですか？」

不意なムギさんの対応に俺と奈亮が戸惑いを見せたが、唯は当然

の様に「私、熱いの！」と言っていた。

「遼くん達はどちらですか？」

「え？何がですか？」

聞いてしまった。頭悪すぎだろう。どう考えたって、紅茶の話だ。

「紅茶は熱いのが良いか、冷たいのが良いか。熱いのが好き？それとも、冷たいの？」

でしょうね。

「熱いのでお願いします」

「んじゃ、俺も熱いので」

「はい！分かりましたわ」

ムギさんは笑顔でそう言うと、見ただけで高級品と判るティーセツトで、紅茶をティーカップに注ぐ。

「ここ、本当に軽音部か？」

「うん。そのはずなんだけどな……」

「「はあ……」」

俺達は二人揃ってため息を吐いた。

本当にこんなので大丈夫なのかと思いながら、紅茶が運ばれてくるのを待つ。

いや、これがこの軽音部なのか……。俺は無理矢理納得するしかなかった。

第六話『楽器！？』（後書き）

次回辺りで遼くんを奏くんに変えます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8756y/>

けいおん♪～奏でる物語～

2011年12月17日10時52分発行